慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	享保期の江戸城西丸への謡本献上と謡曲改訂 (二)
Sub Title	An offering of utaibon to Nishinomaru of Edo castle during the Kyoho era and revision of the verses of noh songs (2)
Author	高橋, 悠介(Takahashi, Yūsuke)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2020
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.55 (2020.) ,p.155- 208
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20200000-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

享保期の江戸城西丸への謡本献上と謡曲改訂（二）

高橋悠介

一、はじめに

前稿（一）では、江戸城西丸への献上本の扣えと考えられる、観世文庫の江戸中期写の謡本の書誌を紹介し、享保十四年の年記を持つ献上識語が多いことや、これらの殆どが外組に属する曲の謡本であることなどを示した。江戸城西丸は将軍嗣子の徳川家重がいた所であり、享保十一年五月に家重の能の稽古の指南役を命じられた観世清親が、享保十四年前後に家重に謡本を献上した際、大久保往忠から文句の改訂を指示されている例もあることをふまえ、「家重公御本」と記されている〔室町期〕写謡本の改訂書入れが、西丸への献上本と密接に関わっていること、西丸への献上本の本文をさらに改訂する形で、後の明和改正謡本に至る本文改訂が行われた可能性にも言及した。

西丸への献上本の扣えについては、主に紺表紙の一群と、石畳艶出模様紺表紙の一群と、渋表紙の一群の謡本がある。まずは、このうち紺表紙の一群を取り上げて、その本文を検討する。具体的には、観世文庫の紺表紙一番綴謡本（100／16／1-19）の十九冊（〔江戸中期〕写、袋綴、二四・八×一七・八糎）のうち、西丸への献上識語がある十冊が対象となる。ただし、このうち「〔和布刈〕」と「大社」については、明和改正謡本の準備段階の稿本として知られる「爐雪集」仁・義・礼の三冊と同様の性

格を持った観世文庫の二十番綴本（8／4）の中にも同じ曲目が入っており、その本文とも比較する必要がある。これについては後日を期し、本稿ではひとまずそれ以外の八曲、輪蔵・〔花月〕・岩舩・鶴亀・土蜘蛛・半蔀・藍染川・〔小鍛冶〕の本文を検討する。

その際、これらの謡本の前後に位置する版本として、江戸中期に広く流布した外組版の元禄三年六月山本長兵衛刊本、及び特異な本文を持つ明和改正謡本と対校する。また、当該曲に「家重公御本」と記された本や、同様に江戸城西丸への献上識語を持つ石畳艶出模様紺表紙謡本がある場合は、併せて対校する。[1]

元禄三年六月山本長兵衛刊本は、法政大学鴻山文庫五234の外組二十冊百番本を用いた。[2] ただし、輪蔵はこの外組百番には含まれておらず、この百番本を補う形で刊行された、同年同人の刊記を持つ六冊三十番本（鴻山文庫五235）を対校に用いた。なお、前稿（一）において、東方朔の西丸献上本扣えの本文を検討するにあたり、〔元禄三年六月〕刊本として、観世文庫の無刊記の五番綴謡本（6／2／3）を用いたが、本書は元禄三年六月刊本の覆刻とみられることに後から気づいた。元禄三年六月の山本長兵衛の刊記を持つ観世文庫の茶色布目表紙五番綴謡本（86／3／7）と同版であることから〔元禄三年六月〕刊本と位置づけ、無刊記本の方を、書入れも含め、対校本として用いたものの、茶色布目表紙謡本（86／3／7）自体が、元禄三年六月刊本を刊記ごと覆刻した謡本であった。覆刻に修が加わっている可能性もあるため、校異として掲出した本文自体は変わらないことは改めて確認したが、不適切な処置であったことをお詫びする。

明和改正謡本は、従来の内組・外組の構成を大きく変えていることから、元禄三年六月刊本で外組に入っている曲の一部が、明和刊本では内組に入っている（今回の対象曲では、半蔀と花月が明和本では内組）。対校本には、観世文庫蔵81／1／1-20（内組百番）・同81／2／1-20（外組百番）を用いた。明和刊本の内組については、大森雅子氏が甲乙丙に分類した三種の版が知られているが、[3] 81／1／1-20はこのうち後修本の乙類に相当する。以上について、次の略号を用いて主な校異を示す。

［西］：紺表紙一番綴謡本（観世文庫100／16／1-19）
［元］：元禄三年六月山本長兵衛刊本（法政大学鴻山文庫五234・五235）

［石］：石畳艶出模様紺表紙謡本「半蔀」「岩舟」「鶴亀」「輪蔵」（観世文庫123／2／8・34・42・44）

［家］：「家重公御本」と追記された元盛筆小型本「輪蔵」（観世文庫）、及び紺表紙中本「花月」（観世文庫2／6／5）

［明］：明和改正謡本（観世文庫81／1／1-20及び81／2／1-20）

当該校異の位置は［元］での丁付により示した。最初に、「家重公御本」と記された写本の存在も知られている「輪蔵」＝「花月」、次に西丸献上を示す石畳艶出模様紺表紙謡本にも同じ曲目がある「岩舩」「鶴亀」「半蔀」を取り上げ（石畳艶出模様紺表紙謡本には、輪蔵も含まれる）、最後にそれ以外の「土蜘蛛」「藍染川」「小鍛冶」を取り上げる。

なお、漢字の宛て方が異なっていても、謡う際に同じ音になる詞（振仮名や胡麻点の数も勘案）は、原則的には校異に取っていない。例えば、濁音の有無、「宣へは」と「の給へは」、「いつく」と「何国」、助動詞の「らむ」と「らん」の違いなどは校異に取っていない。ただし、同じ音になる別表記でも、意味の違いや見消線の性格を考える参考として、校異に含めた場合もある。役名の違いも多くは校異に取っていない。印面で「。」に近い形の区切点は、読点に置き換えている。明和本には全体に振仮名が附されているが、校異掲出にあたって振仮名は省略した。［ ］内に複数の伝本が示されている場合、表記はそれぞれ異なる場合もあるが、最初の本の本文を掲出している。なお、見消や胡粉等による改訂の後の本文が、他本と一致する場合でも、見消や胡粉等の状況を示すため、分けて個別に本文を示した。

二、「家重公御本」と西丸献上本

◆輪蔵

＊［西］（100／16／1）識語「十二月五日西丸へ上ル」（青筆）。

［石］（123／2／44）識語「十二月五日西丸江上ル」（朱筆）。

以上の月日が、［家］末尾に青筆で書入れられた「家重公御本　十二月五日　清親（花押）」と合致する。

上記十曲のうち、「輪蔵」と「花月」には、「家重公御本」と記された写本が知られているため、まずこの二曲について、関

係諸本の校異を挙げる。前稿で示した「家重公御本」と記された写本五点のうち、「輪蔵」は未検出で実見していないが、野上記念法政大学能楽研究所編「観世宗家所蔵文書目録（付解題）」[4]の「四、室町期上掛り謡本」には、101「元盛筆小型本『輪蔵』一冊」として次のような解題がある。

「164×121。帖装。紺表紙。金銀泥模様入り水色題箋。料紙斐紙。墨付13丁（余白三丁）。内題なし（一行あける）。平仮名書。片面六丁。節付墨筆。最終丁裏の左下に「元盛」とあり、元盛の自筆謡本と認め得る。朱と青で文句と節の直しが書き込まれ、余白第二丁に青筆で「家重公御本　十二月五日　清親（花押）」とある。朱筆の直しは、同種の識語を持つ本（78ホの鷺など）と同様、重成・重清・重記のいずれかの本に基づいて清親が校合したのであろう。文句は今と小異のみ。表紙に清親章なる由の先代左近氏の鑑定書を貼付する。」

この本文を［家］として示し、[5]［石］：石畳艶出模様紺表紙謡本「輪蔵」（123／2／44）も併せ、元禄三年六月刊本、明和二年六月刊本との距離を測るべく、五本の本文の主な異同を挙げる。

【1オ】

［元石明］志浅からす候へとも

［家］心さし浅からす（末尾に「候へとも」傍記）

［西］心浅からす候へ共（「心」の後に「ざし」と朱傍記）

［元西石明］是よりやかて

［家］それよりやかて（「そ」傍線見消、「こ」と傍記）

【1ウ】

［元家西石］日も重れは程もなく

［明］日も長閑なるゆふばなの

［元］急候程に

［家］急候程に（後に「是ははや」と傍記）

［西石］急候程に、是はゝや

［明］是ははや

【2オ】

［元］結縁の

［家西石］結縁を
［明］皆人の

［元石］御神の誓ひ
［家］故人のちかひ（「故人」傍線見消、「御神」と太字傍記）
［西］御神の誓ひ（「御」朱見消）
［明］神のちかひ

［元明］普建普成
［家］ふもんふけむ
［西］普文普建（「文」朱線見消、「成」と朱傍記。「賢」朱線見消、「建」と朱傍記）
［石］普文普現

［元明］御身は筑前の
［家］はちくせんの（前に「御身」と傍記）
［西］は筑紫の（「は」朱線見消、「御身は」と朱傍記。「紫」朱線見消、「前」と朱傍記）
［石］は筑前の（「は」見消、「御身は」と傍記）

【2オ】
［元明］荒愚の仰やな
［家］をろかの仰せや（前に「あら」挿入、後に「な」傍記）
［西］愚かの仰せや（前に「あら」朱書挿入、後に「な」朱傍記）
［石］おろかの仰や（前に「荒」挿入、後に「な」傍記）

【3オ】
［元家西石］其中に
［明］其中なる

【3ウ】
［元家西石］北野宮居
［明］北野の宮居

【4オ】
［元明］御僧のおかまんとは
［家］御身のおかまむとは（「身」線で見消、「僧」と傍記）
［西］御身の拝まんとは（「身」朱で見消、「僧」と朱傍記）

［石］御身のおかまんとは（「身」見消、「僧」と傍記）

【5ウ】

［元明］普建普成
［家］ふもんふけむ
［西］普文普賢（「文」に「成」と朱傍記）
［石］普成普建（「文」を胡粉抹消し「成」と上書、「賢」を胡粉抹消し「建」と上書）

【6オ】

［元家西石］竹杖にすかり
［明］つえにすがり

【6ウ】

［元家西石］十二天の其うちに
［明］十二天の其中なる

［元明］行道
［家石］きやうたう
［西］経道（「経」朱で見消、「行」と朱傍記）

［元家西石］御事なれとも
［明］御事なり

［元家西石］御経にをひて
［明］御経にそひて

［元明］普建普成
［家］ふもんふけん
［西］普文普賢（「文」に「成」と朱傍記。「賢」朱線見消、「建」と朱傍記）
［石］普成普建（「文」を胡粉抹消し「成」と上書、「賢」を胡粉抹消し「建」と上書）

【5オ】

［元明］行道
［西］経道（「経」に「行」と朱傍記）
［家石］きやうたう

【7オ】

［元家西］披見の其後

［明］披見終れば

［元家西石］傳大士伴ひ

［明］ふだいじ同く

「輪蔵」は、そもそも〔室町〕写本の［家］の本文がそれ程大きく変わらずに引き継がれている例で、加えて、元禄三年刊本と明和改正謡本との異同が少ない例といえる。それでも、1ウの道行の［明］「日も長閑なるゆふばなの」のように、明和刊本だけが異なる本文を持つ箇所が複数あり、これらは明和時の改訂によるものと考えられる。2オの［明］「神のちかひ」は、［家］の改訂本文と［西］のもとの本文や［石］の本文が、［元］と一致する一方で、［西］の朱による改訂本文が明和本と一致している。

［元］「急候程に」を［明］が「是ははや」としているのは、宝暦十年（一七六〇）に十代将軍となった徳川家治の御台所、五十宮倫子の名前を憚った翳詞だが、［家］の改訂本文でも［西石］でも「急候程に」は削られておらず、［家］の改訂書入れや［西石］の書入れが明和改正の直前になされたものではないことを示している。ただ、全体的に異同が少なく、この曲だけで傾向を見出すのは難しい。

◆花月

＊［西］（100／16／14）識語「十二月六日西丸江上ル」（朱筆）。

「花月」についても、「家重公御本」と記された〔室町〕写本が存在する。その書誌は次の通りである。

○紺表紙中本「花月」（観世文庫2／8／6）〔室町期〕写

袋綴一冊。紺表紙（一九・二×一二・八糎）左上に金泥草模様入朱題簽を貼り「花月」と墨書。表紙右上に「〈十二世重賢　十三世重記／十一世重清　十四世清親〉章　〈二十四世観世元滋花押〉調」と記した近代の素紙を貼る。全十二丁、墨付十二丁。内題なし。片面六行。全体に朱と青と茶と薄紫色の四色の書入れで詞章改訂や節付の直しを施している。末尾に次の奥

書がある。

「　　重賢（花押）
　承應二癸巳八月廿八日　　重清（花押）
　　重記（花押）
家重公御本
　十二月六日　　清親（花押）」

このうち、「重賢（花押）」は茶色、「承應二癸巳八月廿八日　重清（花押）」は朱、「重記（花押）」は薄紫色、「家重公御本／十二月六日　清親（花押）」は青色の筆で書かれているが、全て一筆で、清親が重賢・重清・重記による本に基づいて本文に書入れた、その色分けとこの奥書の色が対応していることを示している。この本を［家］として、以下四本の異同を示す。

【1オ】

［元西明］もちて候を
［家］持て候しを（「候し」朱線見消、「候」と朱傍記）

［元］七歳と申し春の比、行ゑもしらす失ひて候程に
［家西明］いつく共なく失ひて候程に

【1ウ】

［元家西］生れぬさきの身をしれは、〳〵、憐れむへき親もなし、おやのなけれは、我ために心をとむる子もなし、千里を行も遠からす、野に臥山にとまる身も見そ誠のすみかなる、〳〵
［明］なかぬ烏のこゑきけど、〳〵、生れぬ先の父は今、しらずしらねばまして猶、此世の子をばしるべき、やみをも闇と思はねば、道にもまよふことはなし、よしや迷ふと、まよはじな、〳〵

［元］やう〳〵急候程に、是は花の都に着て候
［家］漸急候間是は花の都に付て候（「漸」を朱線見消。「間」を朱線見消、「ほとに」と朱傍記。「花の」を見消、「はや」と朱傍記し、その下に青で「花の」、茶で「花の」と傍記）
［西］急候程に、是ははや花の都に着て候
［明］是ははや都に着て候、

【2オ】

［元西明］清水に参り

［家］清水ヘ参（「へ」朱で見消、「にまいり」と朱傍記）

＊［家］［西］［明］は、ワキ白詞「なふ〳〵」以下、狂言白詞「心得申候」までの、ワキと狂言の問答を載せる。［元］は掲載を省略しており（ただし、一部だけ対応する記事あり）、その部分は［西］［家］［明］の異同箇所のみ掲出する。

［家］なう〳〵是なる人是は遥の遠國の者にて候、本文たる清水へ参候か御参候は、御供申度候（二箇所、青線見消）

［西］なふなふ是は遥の遠国の者にて候、御参り候は、御供申度候

［明］なふ〳〵あれなる人に申べき事の候（狂言）／何事にて候ぞ（ワキ）／是は遠国の者にて候、清水へ御参候はゞ御供申候べし

［家］安き事御供申て参候へし

［西］安き事候供申て参り候へし

［明］安き御事にて候さらば御供申候べし

［家］さて此ころ都はいか様の面白事か御座候（「都」の後に青で「に」挿入。「の」朱で見消、「なる」と朱傍記。「面白」の後に青で「き」挿入、「か」を青線見消、「の」と青で傍記、末尾「候」の後に青で「そ」と挿入）

［西］扨此比都にはいか様なる面白き事の御座候そ

［明］さて此ごろ何にても面白き事はなく候か

［家］都はいつもいわ〳〵さま〳〵の御事御座候中に（二箇所、青線見消。末尾「に」の後に青で「も」と挿入）

［西］都はいつも様々の事御座候中にも

［明］さむ候いつも様々の面白き事御座候中にも、

［家］花月と申て御喝食の御座候か、いきやうの御姿にて面白く御くるひ候（「御」青線見消。末尾「候」の後に薄紫色で「間よひ出し御目にかけ候へし」と傍記）

［西］花月と申て喝食の御座候か異形の御姿にて面白う御狂ひ候彼人を見せ申候へし

［明］花月と申喝食の御坐候が、異形の姿にて面白く御狂ひ候

［元西］定て今日は清水へ御参なき事はあるましく候

［家］定めて今日清水へ御参なき事は有ましく候（「今日」の後に青で「は」と挿入）
［明］今日も清水へ御参なき事はあるまじく候、

［元］御供申彼人に見せ申候へし
［家］御供申て御めにかけうするにて候（末尾に△印を付し薄紫色で「いかに花月へ申候とく〳〵御出候へ」と傍記挿入）
［西］御供申御目に懸うするにて候
［明］彼人を見せ申候べし（ワキ）／さらば其花月とやらんを見せて給り候へ（狂言）／心得申候

【2ウ】
［元家西］残すといへは
［明］残すといひぬ

［元家西］何とて今迄は
［明］何とて今日は

［元］今迄雲居寺に
［家］今まて雲居寺に（「まて」の後に朱で「は」と挿入）
［西明］今迄は雲居寺に

［元西］友達
［家］友たち
［明］友どち

【3オ】
［元］いつものことくに哥を
［家西］いつものことくにこうたを
［明］いつものごとく、小哥を

［元西明］さらさら〳〵さら〳〵さらにこひこそ
［家］さらさらさら〳〵さら〳〵~~さらり~~恋ははこそ（二箇所朱線見消、「さらり」の前に「に」と傍記）

［元］（シテ台詞）候そや
［家］（シテ台詞）候~~そ~~よ（「そ」朱線見消）
［西明］（シテ台詞）候よ

【3ウ】

［元家西］急てあそはし候へ

［明］さらばあそばし候へ

［元西明］ほそはき

［家］ほそゎき（「わ」朱線見消、「は」と朱傍記）

［元］かたきなけれは

［家］かたきゕなけれは（「か」朱線見消、青で「の」、茶で「の」と傍記）

［西明］敵のなけれは

［元］柳の葉をたれ、桃に

［家西明］柳の葉をたれて、百に

［元家西］ナシ

［明］又雲中の雁をも射落せり

［元西］我は又花の

［家］我は花の（「は」の後に「また」と朱傍記）

［明］我は此花の

【4オ】

［元西］名こそかはるとも

［家］名こそかはゎとも（「れ」朱線見消、「る」と朱傍記）

［明］その名かはる共

［元家西］かり衣の袖

［明］道服の袖

【4ウ】

［元家西］仰られ候

［明］おふせられ候ものかな

［元家西］人の御所望にて候

［明］ひと〳〵の

［元］當寺の謂を曲舞に作りて御諷候よしを聞召て候
［家］當寺のいはれを曲舞につくりて御うたひ候よしをきこしめし候て
［西］當寺の謂曲舞に作て御謡ひ候を聞召て
［明］當寺の謂を作り御うたひ候よしを聞召て

［元家］安き事さらは
［西］安き事さあらは
［明］安き事

【5オ】

［元西明］されはにや
［家］されは（末尾に「にや」と朱傍記）

［元西］坂の上の田村丸
［家］坂上の田村丸（「坂」の後に「の」と朱傍記）
［明］坂上の田村麻呂

【5ウ】

［元西明］それをあやしめ
［家］是をあやしめ（「是」朱線見消、「それ」と朱傍記）

［元西明］水上を尋るに
［家］水上を尋ぬれは（「れは」朱線見消、「るに」と朱傍記）

［元家西］流れに埋れて名は青柳の朽木有
［明］ながれによこたはりふせる柳の朽木あり

【6オ】

［元家西］千手の誓ひには
［家］千手のちかひにも（「も」朱線見消、「は」と朱傍記）

［元家西］今の世までも申なり
［明］今の世までも申なれ

［元家明］よく〳〵見候へは
［西］能々見れは

［元西明］某か俗にて失ひし
［家］俗にてうしなひし（前に「それかしか」と朱傍記）

【6ウ】

［元西明］諸國を御めくり
［家］諸國をは御めくり（「は」朱で見消、青で「は」と傍記）

［元西明］彦山
［家］彦の山（「の」朱線見消）

［元］天狗にとられてかやうに諸国を廻り候よ
［家西］天狗にとられてか様に諸國をめくり候
［明］天狗にとられ諸國を廻り、此処に来て候

［元明］疑ふ處もなし
［家］うたかふ所もなし（「も」青線見消）
［西］疑ふ所なし

［元］是社父の左衛門尉家次よ
［家］是こそ父の左衛門尉家次よ（「尉」朱線見消）
［西］是こそ父の左衛門家次よ
［明］是こそ父よ

［元西明］見忘れて有か
［家］見忘れあるか

【7オ】

［元家西］なふ〳〵御僧は何事を仰せられ候そ
［明］なふ御僧は何事を仰候ぞ

［元西明］さむ候この花月は
［家］さん候此花月は（「此花月は」薄紫色の線で見消）

［元明］某か俗にて
［西］某俗にて

［元家西］筋なき事を承候先々そなたへ御のき候へ、いかに花

月へ申候、いつものやうに八はちを御うち候ひて皆人に御見せ候へ

（ただし、［西］は「へ申候」ナシ。［家］は、薄紫色の筆で「実とかくやれはうりを二つにわつたるやうに候、此上は八はちを御打、此程御め□□候山々をうちつれたつて御とうり候へ」と傍記するが、薄い色で一部は判読不能）

［明］実と御申候へば、瓜を二つにわつたる様にて候、此上はいつものごとく八撥を御うち候ひて、うち連だつて故郷へ御帰候へ

【8オ】

［元家西］名高き比叡の大嶽に

［明］名さへも高き大比叡に

［元家西］三上大峯釈迦の嶽（［家］山上大峯釈迦のたけ、［西］山上大峯釈迦の嶽）

［明］山上大峯浅間やま

【8ウ】

［元西］めくり〳〵てあの僧に、あひ奉る

［家］めくりまいりてあの僧に（「まい」青線見消、「めく」と朱傍記）

［明］我父に、あひたてまつる

［元家西］捨てさ候はゝ、あれなる御僧に

［明］捨てもろともに、

［元西明］うれしかりける

［家］名残なりける（「名残なり」朱線見消、「うれしかり」と朱傍記）

「花月」は、［家］の室町期の本文の古態性と、明和刊本の改訂の度合いが比較的目立つ例である。2ウの［西明］「今迄は雲居寺に」が［家］の室町期本文や［元］に対して「は」を補っている例や、3オの［西明］「敵のなけれは」が［家］の青（清親）・茶（十二世重賢の写本に基づく）の筆による改訂と一致し、［元］と異なる例など、［西］と［明］が一致する例も少しある。ただし全体としては、明和の改訂で大きく本文が変わっており、

1ウの「生れぬさきの身をしれは」以下の上歌などは、明和本では丸ごと差し替えられている。

［家］で「家重公御本」は青筆で記されており、2オの問答などにおいては、［家］の青筆による改訂本文と［西］が一致する例が幾つか確認できる。ただし、青筆だけでなく、朱筆も含めた改訂本文が、江戸城西丸への献上本の扣である［西］の本文に近似している。

7オの［明］「実と御申候へば」の本文は、［家］の薄紫色の筆による書入れと近いが、薄紫色の書入れは清親の前の十三代観世大夫重記（滋章、享保元年没）の謡本に由来すると考えられる本文で、それが明和刊本に活かされている点は特に注目される。

三、西丸献上識語を有する紺表紙謡本と石畳艶出模様紺表紙謡本

続いて、西丸献上を示す石畳艶出模様紺表紙謡本にも同じ曲目がある「岩舩」「鶴亀」「半蔀」を取り上げ、元禄三年刊本や明和二年刊本との校異を示すことで、［西］（紺表紙謡本）と［石］（石畳艶出模様紺表紙謡本）の本文の特色をみておく。

◆岩舩

＊［西］（100／16／8）識語「享保十四年七月八日　清親／西丸へ御本章幷持当リ共相納／大久保伊勢守殿迄上ル」（朱筆）。

［石］（123／2／34）は外題の上に「西」と朱書。

【1オ】

［元西石］実治れる四方の國、〳〵、関の戸さゝて通ん

［明］道ある御代の秋とてや、〳〵、国々豊なるらん

＊［西］の見返し書入れ「〈次第〉道ある御代の秋とてや、〳〵、國々ゆたかなるらん」は［明］と一致する。

［元明］當今に仕へ奉る

［西］~~十~~一条院に仕え奉る（「一条院」朱で見消、「當今」と朱傍記）

［石］一條院に仕へ奉る

［元西石］とさしをさゝす

［明］とざしをわすれ

［元明］御代にて候、去間
［西石］御代なれば

［元］去間摂州
［西石］摂州
［明］さる間摂津國

【1ウ】
［元西石］たて
［明］立てられたるより

［元］寳を買とるへしとの宣旨に任せ
［西石］寳物を買取べしとの宣旨に任せ
［明］寳迄悉積来りたるよし申候程に

［元西石］津の国
［明］摂津国

［元西石］何事も心に叶ふ此時の、〳〵、ためしもありや日の本の、國豊かなる秋津洲の浪も音なき四の海、こま唐土も残りなき、みつきの道の末爰に、津守の浦に着にけり、〳〵
［明］朝立や、都の空を跡にみて、〳〵、たなびく雲の伊駒山、とほくなるをの沖津舟、よそにみなして行程に、淡路ぞむかふ住よしの、宮居にはやく着にけり、〳〵
＊［西］の見返し書入れ「〈道行〉朝立や都の空を跡にみて、〳〵、たなひく□□（虫損）伊駒山、よそになるをのおきつふね、めにもかくて行程に、淡路そ向ふ住吉の、宮ゐにはやく着にけり、〳〵」は［明］と共通する部分が多い。

【2オ】
［元西石］市のちまたに、出る也
［明］市の巷ぞ、にぎはしき

［元西石］君のめくみに、よももれし
［明］君のめぐみに、なびくなり

［元石］夫圓満十里の外なれ共

［西］未遠満十里の外なれ共（朱線見消）
［明］ナシ

［元石］爰に御幸をふかみとり
［西］爰にみゆきをふかみどり（墨線見消）
［明］ナシ

［元］奈にたくへて千世までもたゝしき君の御たひ居
［西］松にたぐへて千代迄もたゞしき君の御恵み（「にたぐへて千代」墨線見消、「もろともにいつまでも」と傍記、「たゞしき」墨線見消、「栄行」と傍記）
［石］松にたぐへて千代までも忠しき君の御恵
［明］まつもろともにいつまでも栄行君の御恵み、

【2ウ】

［元西石］松の風
［明］松の影

［元西石］伊勢しまや塩干にひろふたま〳〵も、〳〵
［明］ナシ

【3オ】

［元西石］時しも（［西］の剝離した貼紙の中に「折」と記した紙片あり）
［明］折しも

＊［西］は朱の改訂の上に、二紙八行分の記事を有する貼紙を付しており、以下、貼紙本文を［西貼紙］として示す。［西貼紙］は概ね［西］の朱の改訂をふまえ書き直した本文とみられる。他に、［西貼紙］断片に「のみちある時は」と記した紙片などがあるが元の位置不明）

［元］あまた多き中に
［西］数多おほき中に（「おほき」朱線見消、「きたる」と朱傍記）
［西貼紙］数多来る中に
［石］数多多き中に（「多き」朱線見消、「来る」と朱傍記）
［明］多其中に

［元］是なる者をよく見れは、姿は唐人なるか、声は大和詞也
［西］これなる者を見れば、姿は唐人に似たれ共、聲は大和詞なり（朱線見消）
［西貼紙］ナシ
［石］是成者をみれは、姿は唐人に似たれとも、聲は大和詞なり
［明］さもうつくしき童子、従者とおぼしき童子に、

［元］又きんはんに玉をすへて持たり、そも御身はいか成人そ
［西］銀盤に玉をすへて持たり、是はいかなる者そ（「是」朱線見消。「そ」朱線見消、「にてあるやらん」と朱傍記）
［西貼紙］銀盤に玉をすへて持たるは、いかなる者にて有やらん
［石］又ぎんばむに玉をすへて持たり、是は如何成者そ
［明］美玉を金盤に置て持せたるは、いかなる事にてあるやらん

【3ウ】
［元］さん候かゝる御代そとあふき参りたり
［西］さん候かゝる御代そと悦び参りたり（「かゝる」朱線見消、「あまりに目出度」と朱傍記。「そと悦び参りたり」朱線見消、「なれば宝を君にさゝげ申さんとて」と朱傍記）
［西貼紙］さん候餘りに目出度御代なれば、宝を君に捧奉らんとて
［石］さん候かゝる御代そと悦び参りたり
［明］かゝるめでたき御代なれば

［元石］又是なる玉は私に持たる寶なれ共、明かに目出度御代なれは
［西］又是なる玉は、私に持たる宝なれども、餘りに目出度御代なれば（朱線見消、「是まてあらはれ出たるなり」と朱傍記）
［西貼紙］是まで顕れ出たるなり
［明］寶を君にさゝげむために、是まで持せて参りたり

［元］是は君に捧物にて候
［西］是は捧物にて候（朱線見消）
［西貼紙］ナシ
［石］是は捧物にて候
［明］ナシ

［元］夫治れる御代のしるしには、賢人も山よりいて、聖人も君につかふといへり、然れは御身は誰なれは、かゝる寶を捧るやらん、委奏聞申へし

［西］夫治れる験には、賢人も山より出、聖人も君につかふといへり、然は御身は誰なれは、かゝる寶を捧くる由、委く奏聞申べし（朱線見消、「扨玉の名はいかに」朱傍記）

［西貼紙］扨其玉の名はなにと申やらん、委く語り給ふべし（「いかに」と記した剝離紙片があるのは、「なにと」部分の貼紙か）

［石］それ治れるしるしには、賢人も山より出、聖人も君につかふといへり、然は御身は誰なれは、かゝる寶をさゝくるよし、委敷奏聞申へし

［明］さて其玉の名はいかに、委語り給ふべし

【4オ】

［元明石］あらむつかしと

［西］荒六ケ敷と（「荒」朱線見消）

［元西石］唐かつほの玉とても、寶珠の外に其名はなし、是も津守の浦の玉、心のことしと思召せ（「石」は末尾「召」の後に「せ」と朱で追記）

［明］潮満潮涸ふたつの玉も、御代を治むるたとへぞかし、今此玉も大君の、御意のごとしと思召せ

［元］心意のことしと聞ゆるは、さては名におふ如意寶珠を、我君にさゝけ奉るか

［西］意の如しと聞ゆるは、扨は名におふ如意宝珠を、我君に捧奉るか（「ゆる」朱線見消、「とき」と朱傍記、「聞とき」と記した剝離紙片があるのも、この記事の貼紙か。「を、我君に捧奉るか」朱線見消）

［石］意のごとしと聞ゆるは、扨は名におふ如意寶珠を、我君に捧奉るか

［明］さも御意のごとしとは、さては名におふ如意寶珠をかたちにあらはしさゝぐるか

【4ウ】

［元］夫賢王の御代のしるしには、天も納受し地もうるほひ、かゝる寶も出現すへし

［西］夫賢王の御代の代のしるし、天も納受し地も潤ふ、かゝ

る寶も出現すべし（朱線見消二箇所、この上に貼紙「賢王の御代のしるしには、かゝる寶も出現し」）

［石］夫賢王の御代のしるし、天も納受し地もうるほひ、かゝる寶も出現すへし（「ほひ」朱で見消、「ほふ」と朱傍記）

［明］聖主の御代のしるしには、天も納受し地もうるほひ、かゝる寶も出現すべし

［元石］実〳〵今の御代の有様、治めぬ國もをのつから

［西］実々今の御代の有様、治めぬ國もをのづから（「実々今の御代の有様」朱線見消）

［明］実有難や君の御影、八洲の外もおのづから

＊以下、［元］「なひきしたかふ四方の国」以下「道すくに」までの掛合い、台詞は変わらないが、［元石］と［明］とでシテ・ワキの担当箇所が全て逆。［西］は途中まで［元］と同様の形だが、「橿が原の浪間より」をワキ台詞に変え、以下、明和本と同様の形。

［元西石］（ワキ台詞）なひきしたかふ四方の国

［明］シテ／なびきしたがふ此時に

［元西石］シテ／はこふ寶やこまくたら（［西］は「高麗百済」を朱線見消）

［明］ワキ／はこぶ寶や高麗百済

［元西石］ワキ／唐土舟も西の海（［西］は「唐土舟も」を朱線見消にした上で、前掲「百済」の「済」も含め全体を貼紙抹消。別に剝離した紙片「西の海」あり）

［明］シテ／もろこし舟も西の海

【5オ】

［元石］爰に御幸を住吉の、神と君とはゆきあひの、まのあたりあらた成る、君の光りそめてたき

［西］爰に御幸を住吉の、神と君とは行あひの、まのあたり新たなる、君の光りぞめでたき（「爰に御幸を」朱線見消、「跡垂まして」と朱傍記。「と君とは行あひの」を貼紙で「のみ室のゆふだすき」に改訂、「なる、君の光りぞめでたき」を貼紙で「しや、君のめぐみぞありがたき」に改訂。他に剝落

した貼紙がある可能性も。）

［明］跡たれまして住吉の、神のみ室のゆふだすき、かけまくもかしこしや、君に寶珠をさゝげむ

［元西石］千世まてときくうる市の数かすに、〳〵

［明］千世まてと、きこゆる市の聲々に、〳〵

【5ウ】

［元西石］春の夜の一時の

［明］春の夜の一時は

［元西石］たとへはあらし

［明］たがひはあらじ

［元西石］せうふう（［西］は「松風」に振仮名「セウ」「フウ」）

［明］松風（振仮名「マツカゼ」）

［元明石］たつ市やかた数かすに

［西］たつ市屋形数々に（［屋形］を貼紙で「人の」に改訂）

［元石明］みかきもつゝくかたそきの　／みとしろ錦あや衣（だし［石］は「みとしろの」とし「の」を朱で見消）

［西］御垣も続くかたそきの　／みとしろ錦綾衣（以上全て貼紙抹消）

［元石］比も秋なる

［西明］比も秋なり

【6オ】

［元西石］繪嶋か礒はなゝめにて（［西］は「嶋」以下を貼紙抹消）

［明］繪島がさきはなゝめにて

［元西石］捨小舟

［明］あま小舟

［元西石］はう〳〵たり（［西］は「たり」を貼紙抹消）

［明］滔々

［元］松吹風はせつ〳〵として、さゝめことかくやらん
［西石］松吹風は颯々として、さゝめごとかくやらん（［西］は「さゝめごとかくやらん」を貼紙抹消）
［明］松吹風は颯々たり

【6ウ】
［元西石］又岩舟のよるの空、月のあまちに急くへし、いとまを申て人々よ
［明］暫爰に待給へ、我岩舩に寶を積み、月影共に指よすべし
［元西］岩舟のよりくるとは
［石］岩舩のよゝくるとは（「る」見消、「り」と傍記）
［明］岩舩をよせんとは
［元明］実人〳〵は
［西石］実々人は
［元］天も納受壱見城の、寶を爰にくたさんとて
［西石］今此御代の有難さに、天の納受喜見城、寶を爰にくだ
さんとて（［西］は「とて」を貼紙抹消）
［明］ナシ
［元］雲の波に只今爰によすへき也
［西石］雲の波、唯今爰によすべきなり
［明］雲の波を、はやこぎわけてよすべきなり

【7オ】
［元石］其岩舟を漕よせし、あまのさくめは
［西］その磐舟をよせて、天の猿女は（「猿」朱線見消、「探」と傍記）
［明］其岩舟を守るなる底津少童は
［元西石］尋ねてそ、秋津嶋ねは宮始
［明］よそひてぞ、数の寶をさゝげんと
［元石］久かたの天のさくめか岩舟をとめし神代の幾久し
［西］久堅の天の猿女が岩舩を、とめし神代の、いく久し（「猿」朱線見消、「探」と傍記）

［明］ナシ（代わりに「抑是は、底津少童の神とは我事なり～形はあらはれたり」まで明和本独自記事あり）

［元西］我は又

［石］我はまた（「また」に「是」と傍記）

［明］我は是

【7ウ】

＊［西］のみ、地謡「佳例を移し」の右に「万代かけて」の貼紙あり。

［元］あまのさくめか

［西］天の猿女は（「猿」朱線見消、「探」と傍記）

［石］あまのさくめは

［明］ひけや岩舟

【8オ】

［元西石］えめくり

［明］立めぐり

【8ウ】

［元西石］金銀珠玉はふりみちて

［明］金銀珠玉をつみみて、

［元西石］津守の浦に、〳〵

［明］津守の浦に

［元西石］御代とそなりにける

［明］御代こそ有難けれ

＊［西］最終丁に、「めてたき御代は」「運ふもみ」「きしの」「たり」と記された、剝落した貼紙を挟むが、該当位置不明。

「岩舩」は、明和刊本の段階で行われた改訂が顕著である。［西］には多くの貼紙による改訂があり、どの段階が西丸献上本の本文に当たるのかが問題となるが、［石］の外題の上に記された「西」も西丸献上を示す符牒と考えられることから、［西］と［石］とに共通する本文を西丸献上本の本文と位置づけるのが妥当で

ある。貼紙改訂前の［西］と［石］の本文は近いため、［西］は西丸献上本の扣をさらに貼紙により改訂したものであろう。その際、［西］の貼紙改訂された本文が、［石］よりも［明］に一致したり、近い形となっている箇所が多い点が注目される。［西］には見返しや上部余白などに観世元章による書入れがあり、この写本が清親から元章に引き継がれたことをうかがわせる。貼紙改訂には元章が関わっているのではないだろうか。

1オの次第と1ウの道行については、明和刊本で従来の文句が丸ごと差し替えられているが、［西］の見返しには、明和刊本の本文と関連する書入れがある。その書入れは校異に注記した通り、次第は明和刊本と一致しており（表記は少し異なる）、道行は概ね共通するが、［明］「とほくなるをの」に相当する箇所が「よそになるを」になっているなど異同もある。これは［明］に至る前の検討段階での本文の可能性が考えられよう。こうした点も含めて考えると、［西］の本文改訂は、明和刊本の準備段階でなされたものと位置づけるのが自然である。ただし、［西］の改訂本文と［明］にも相違があり、例えば、4ウの［元］「夫賢王の御代の」以下に相当する部分などについては、［明］は［西］の改訂本文とも異なる本文となっており、［西］の改訂本文は過渡的な段階を示しているようである。

◆鶴亀

＊［西］（100／16／13）識語「享保十四年七月十日右之通／西丸江上ル持当リ共相納候／清親」（朱筆）。［石］（123／2／42）は外題の上に「西」と朱書。

【1オ】＊掛合の詞の役担当の校異は省略する。

［元西石］節會の事はしめ

［明］節会の初とて

［元西石］光を天子の叡覧にて

［明］光あまねき君が代を

［元西石］百官卿相に至る迄

［明］百官百寮もろともに

［元］袖をつらね踵をつき

［西］そでをつらね踵をつひで（「そで」「つら」「ひ」は、元の

字を胡粉抹消して上書）

［石］■■を■■踵をつ■て（■部分、上から順に「そて」「□へ」「き」を胡粉抹消）

［明］袖をつらね踵をついで

【1ウ】

［元］こは何事そ

［西］奏聞とは何事そ（朱線見消）

［石］ナシ（ただし、「いかに奏聞申べき事の候、まい年」の「べき事の候、まい年」は胡粉抹消した上に書かれており、下の字は判読困難）

［明］ナシ

［元］月宮殿にて楽を

［西］月宮殿の楽を（「の」朱で見消、「にて舞」と朱傍記）

［石］月宮殿にて舞楽を（「にて舞」部分、元の本文（「の」か）を胡粉抹消して傍記）

［明］月宮殿にて舞楽

［元西石］兎も角もはからひ候へ

［明］ナシ

【2オ】

［元］千代の様（「様」胡麻点二つ）

［西石明］千代の例

［元石明］たんちやうの鶴（［石］「丹頂の靄」）

［西］丹青の鶴

［元］君もえつぼに入せ給ひ

［西］きみも御かむのあまりにや（「□□□ゑつ□□入せ給ひ」を胡粉抹消し、朱傍記）

［石］御門もゑつぼに入せ給ひ

［明］君も御感のあまりにや

［元］舞楽の秘曲はおもしろや

［西］舞楽の秘曲はおもしろや（「の秘曲はおもしろや」朱線見消、「を□□□てまひ給ふ」と朱傍記。一部虫損で判読不能。）

［石］舞楽を奏してまひ給ふ（「舞楽」の後、「を」を傍記補入。その後の約七字分（下の字の末尾は「や」、他は判読困難）を胡粉抹消し「奏してまひ給ふ」と上書）
［明］舞楽を奏して舞たまふ

［元西石］色々妙なる
［明］匂ひも妙なる

【2ウ】
［元西石］雪の袂
［明］雪のたもとを

［元明］舞給へは
［西］祝ひ給へは（「祝」朱線見消、「舞」と朱傍記）
［石］まひ給へは（「ま」部分、胡粉抹消して上書。下の字は判然としない）

「鶴亀」は明和刊本段階での改訂がそこまで多くない曲である。2オの［明］「舞楽を奏して舞たまふ」は、［西］［石］の改訂本文が［明］と一致しているようだが（［西］の記事の一部は虫損で不明）、その直前の［明］「君も御感のあまりにや」は［西］の改訂本文と一致し、［西］の改訂前の本文と類似する［石］とは異なっている。

◆半蔀
＊［西］（100／16／3）識語「十月廿五日西丸へ上ル」（青筆）。
［石］（123／2／8）識語「十月廿五日西丸江上ル」（朱筆）。

【1オ】
［元］北山紫野
［西石］北山紫野（「北山」朱線見消、［西］は青で［石］は朱で「大キニワロシ」と傍記）
［明］紫野

［元西石］住居仕
［明］住居する

［元西石］右非情草木たり

［明］夫非情草木なり

【1ウ】
［元西］手にとれは
［石］おりつれば（「手にと」を胡粉抹消、「おりつ」と上書）
［明］をりつれば

［元西石］今迄は
［明］ナシ

【2オ】
［元西石］しろしめさぬは
［明］しろしめさぬも

［元西石］名のらすと
［明］名のらずとも

【3オ】
［元西石］けにも昔のゐまし所、さなからやとりも
［明］昔を残す半蔀のや、さながら門にも

［元］夕陽
［西石明］夕陽の

【3ウ】
［元石明］物すこの気色や
［西］物すこの夕や（「夕」朱線見消、「けしき」朱傍記）

【3ウ】
［元西石］竹垣有し世の
［明］垣根も有しよの

【4オ】
［元西明］かきほあるとも
［石］垣ほあ共（「り」見消、「ル」と傍記）

［元西石］草の半蔀をし明て
［明］門の掛戸をおしあけて

［元西］なみたも
［石］なみたの（「も」を胡粉抹消、「の」と上書）
［明］涙の

【4ウ】

［元西石］其比源氏の中将と聞えしは
［明］其比光君、御忍のつゐでにや

［元西石］みよしのや御嶽精進の御声にて、南無
［明］うばそくが、心ぼそげに聲立て、なも

［元西石］今も尊き
［明］今は尊き

［元西］其時の思ひ出られて
［明］来ん世迄深頼れて

［元西］猶それよりも
［明］猶今とても

［元西石］惟光をまねきよせ
［明］随身を召れつゝ

【5ウ】

［元西］折てこそ　／折て社
［石］寄てこそ　／寄てこそ（「寄」いずれも「折」を胡粉抹消して上書）
［明］よりてこそ　／寄てこそ

［元西石］みえし
［明］見つる

【6オ】

［元西石］宿りの
［明］門従も

「半蔀」では、［元］［西］［石］の三者が一致し、［明］がこれを改訂したと考えられる異同が多い。1オで［西］［石］が共に「北山紫野」の「北山」を見消にし、両者とも「「大キニワロシ」と傍記しているのは、両者の関係の深さをうかがわせる。「輪蔵」「岩舩」「鶴亀」では［西］の改訂本文の方が［明］に近い傾向にあったが、「半蔀」では［石］の改訂本文の方が［明］に近い。具体的には、1ウの［明］「をりつれば」、4オの［明］「涙の」、5ウの［明］「よりてこそ」に相当する箇所において、［石］の胡粉を用いた改訂が［明］に一致し、［石］の改訂前の本文と［西］が一致する。

四、その他の紺表紙謡本と明和の改訂

以下、土蜘蛛・藍染川・小鍛冶の三曲については、石畳艶出模様紺表紙謡本に対応する曲が入っていないため、元禄三年刊本、明和二年刊本との異同のみ掲出する。

◆土蜘蛛

＊［西］（100／16／2）識語「享保十四年七月十三日右之通清親西丸御本章持当リ共相納上ル」（朱筆）

【1オ】

［元明］風のこゝろに任すらむ

［西］風邪の心ちを尋ん（「を」胡粉上書）

［元］頼光の御所に

［西］頼光の御内に（「内」胡粉上書）

［明］頼光朝臣の御内に

［元明］女にて候

［西］女にて侍候ふ（「侍候ふ」朱で見消、「候」と傍記）

［元明］扨も頼光

［西］さても頼光（「頼光」朱線見消）

［元］典薬のかみに

［西］典薬寮より（「寮」の朱傍記「カミ」の右に「の頭」と傍記）

［明］典薬頭より

［元］御薬を申
［西明］御薬を持

［元］頼光の御所へ帰り候
［西］頼光の御所へ参り候（朱線見消、「御館（ミタチ）にかへり候○」と傍記）
［明］御館に帰り候

［元］いかに誰か御入候
［西］いかに誰か御入候（朱線見消）
［明］ナシ

［元］誰にて御座候そ
［西］誰にて渡り候そ（朱線見消）
［明］ナシ

【1ウ】
［元］典薬の頭より御薬を持、小蝶か参りたる由御申候へ
［西］典薬寮より小蝶か参りたる由御申候へ（朱線見消）
［明］ナシ

［元］心得申候御機嫌を以て申上うするにて候
［西］心得申候御機嫌を以て申上うするにて候（朱線見消）
［明］ナシ

【2オ】
［元］いかに申上候典薬の頭より御薬を持小蝶の参られて候
［西］いかに申候典薬寮より御薬を持て小蝶か参りて候（朱線見消）
［明］ナシ

［元］此方へ来れと申候へ
［西］此方へ来れと申候へ（朱線見消）
［明］ナシ

［元］畏て候こなたへ御参り候へ
［西］畏て候此方へ御参り候へ（朱線見消）

［明］ナシ

［元明］如何に申上候
［西］ナシ（朱傍記「△いかに申上候」）

［元西］身もくるしみて
［明］身もつかれて

［元］今は期を待有様也
［西明］更に期を待はかりなり

【2ウ】

［元明］実々仰はさる事なれ共
［西］いや〳〵それは苦しからす

［元］病ふは苦しき物なから、療治にかなふ御事のためしは
［西］やまふは苦しき習ひなから、療治によりて癒る事の例も
［明］おもきやまふも薬にて、治るみちのしるしある、例は

［元］ちからをそへて様々に
［西明］思ひも捨す様々に（［西］の「に」は「の」を胡粉抹消し、上書）

［元西］色を尽して
［明］品をつくして

［元］境もしらぬよそほひの
［西］境ひも知ぬ有様の
［明］わかちもしらぬいたはりに

［元］風情かな
［西明］心かな

［元西］実や心をてんせす
［明］今はこゝろもむすほゝれ

【3オ】

［元西］心と成そ

［明］病となるぞ

［元］「然るに六脉の其こころへをしらるゝや、か程くるしき胸のうち、いかて薬のなかるへき、今の我等か有様をかたるもよしな世の中に神も仏もなかるらん、人しれぬ思ひをは、たれにかたりてなくさまんと、起臥に我こゝろくるしき事をいかにせむ」

［西明］ナシ

【3ウ】

［元西］月清き、夜半ともみえす雲霧のかゝれは曇る、心かな

［明］ナシ

［元西］御座候そ

［明］候ぞ

［元］其名はいかに

［西明］其名をなのれ

［元］ナシ

［西］愚かの仰候や、悩ませ給ふも（「ませ」を朱線見消、「み」と傍記）

［明］愚の仰候や、なやみ給ふも

［元西］さゝかにの、蜘の振舞かねてより、／しらぬといふに猶近付姿は蜘蛛のことくなるか

［明］さゝがねの、／蜘の姿をあらはして

【4オ】

［元西］化生と見るよりも、〳〵

［明］化しやうと見るよりも

［元西］抜ひらき

［明］ぬきはなち

［元］あしをも

［西］足も（「も」、元の字を胡粉抹消し上書）

［明］足も

［元西］のゝしる
［明］の給ふ

【4ウ】
［元］実々早く来りたり
［西］いしくもはやく来ものかな（「実々」を胡粉で抹消、「いしくも」と上書。「ものかな」も元の本文を胡粉抹消し上書）
［明］いしくも早く来る者かな

［元］聞せう
［西明］聞せ候べし

［元］今夜夜半はかりの比かとよ
［西］夜半はかりのころ
［明］夜半ばかりの比

［元］くへき宵さゝかにの、蜘のふるまひかねて
［西］来へき宵なりさゝかにの、蜘のふるまひ兼て
［明］くべきよひなりさゝがねの、蜘のおこなひこよひ

【5オ】
［元］古哥を詠し
［西］古哥をつらね
［明］古哥を吟じ

［元］其たけ七尺はかりの蜘となつて
［西］則七尺はかりの蜘の形もの化生となり、我に（朱線見消、「となつて」と傍記）
［明］即七尺計の蜘となつて、我に

［元］かくるところを
［西明］繰懸しを

［元］とて行ゑをしらすうせぬ、
［西］とてかきけす様に失し也、（「失」「も」胡粉上書）
［明］は書消様に失ぬ、夫より我病則いえたり

［元］是といふも偏に剱のいとくと思へは、けふより
［西］是と申も偏に剱の威徳と思へは、今日よりしては
［明］是も剱の威徳なれば、今日よりは

【5ウ】

［元］かた〳〵もつて目出たふ候
［西］旁目出度御事にて候
［明］かた〳〵めでたき御事にて候

［元］是にいまた御太刀つけの迹とおほへて血なかれ候
［西］又太刀付の跡を見候へは、けしからす血の流れて候
［明］又御太刀づけの跡を見候へば、けしからず血の流て候

［元］此血をしるへにたつね行
［西］此血をたんだへ
［明］是を知べにて、

［元］実々いしくも申者哉、さらは急て参り候へ
［西］ナシ（上欄外に朱書「急て参り候へ、／畏て候」）
［明］さあらば尋求候へ　／畏て候

【6オ】

［元］土も木も、我大君の國なれは、いつくか鬼のやとりなる
［西］白波の、音更過る諍ひに、猶作りそふ、凱哥（「凱哥」部分、元の本文を胡粉抹消し上書、「トキノコヱ」と朱傍記）
［明］土も木も、我大君の國なれば、いづこか鬼の、すみかなる

［元］すゝみ出
［西明］ナシ

【6ウ】

［元西］其声に、力をえたる斗也
［明］其声は、大地にひゞく、計なり

［元西］火焔を放ち、水を出す
［明］ひかりをはなち、焔を出す

［元明］年をへし

［西］年をふる

【7オ】

［元西］君か代に

［明］時を得て

［元］やまふとなりしに

［西］奉れは（「れは」胡粉上書）

［明］奉れは

［元西］手に手をとりくみ

［明］すき間をあらせば

【7ウ】

［元西］つゝめて、たをれ臥てそ

［明］つゞめ、すくみかねてぞ

［元西］神國王地

［明］神國王土

［元］いさみて

［西明］勇み

「土蜘蛛」については、［西］の上部余白に型付が書入れられており、これが観世元章の型付と考えられる点について深澤希望氏が考察する中で、1オの［明］「典薬頭」や［明］「御館に帰り候」が［西］の改訂本文と合致していることなどから、［西］に明和刊本に至る前の過渡的な改訂がうかがえることに言及している。[6] 同様の例は幾つかあるが、6オの［西］「白波の」以下など、［西］で大きく改訂された本文が［明］に採用されていない例もあり、［西］の後にさらに改訂が行われたのが［明］であろうことは深澤氏の指摘する通りである。本曲の場合、［明］の改訂は全体にわたって細かく行われたことが推測される。

◆藍染川

＊［西］（100／16／7）識語「西丸上ル卯月十一日」（朱筆）。

【1オ】

［元西］忘れは草の

［明］忘るゝ草の

［元西］忍ふは

［明］忍ぶや

［元明］つくし人の

［西］筑紫人に

［元西］うき中の、うとく成ぬる身のはては兎にも角にもあらはあれ、此子の為に父を尋ねて

［明］花色の、うつろはなくにひきわかれ、おもひかさなるおもひ子の、父をしとふも見るめうければ

［元西］馴もなれぬに遠旅の心は子にや迷ふらむ

［明］なれぬ旅路に立そふる子ゆゑにいとゞ迷ふなり

【1ウ】

［元］野山いくゑか

［西］野山幾重ホ（「か」墨線見消、「を」と傍記）

［明］いくへ野山を

【2オ】

［元西］急候程に

［明］是ははや

［元］先此所にて宿をからふするにて候

［西］先此処に宿をからふするにて候

［明］先此処にて宿をからばやとおもひ候

［元明］都方の者

［西］旅人（朱線見消、「都方の者」と朱傍記）

［元西］心得申候

［明］やすき御事にて候

［元］是は女性旅人にて候程に、奥の間に置申さうするにて候

［西］是は女性の旅人にて渡り候、奥の間に置申さうするにて候（「渡り」を朱線見消、「渡り候」の後に「程に」と朱傍記）

［明］ナシ

【2ウ】

［元西］神主殿と申人の

［明］神主殿の

［元明］あるしにて御座候

［西］主にて御座候（「御座候」朱線見消、「候」と朱傍記）

［元］都より人の文をことつかりて候

［西］都より人の文をことつかりて候（「人の」朱線見消）

［明］都よりと仰候ひて、此文を

［元西］給り候へかし

［明］給り候へ

［元明］安き御事にて候

［西］安き御事（「にて候」と朱傍記）

［元西］ナシ

［明］いかに旅人へ申候、只今の文を神主殿の御目にかけて候へば、則御返事を給はりて候御らん候へ

［元西］あらうれしや候

［明］ナシ

【3オ】

＊以下、アイとの問答を省略している場合は、校異の対象から除いている。問答については、［西］が最も詳しく、［明］は殆どを省略している。

［元］さらは此文を参らせられやかて御返事を取て給ひ候へ

［西］さらは此文を参らせ候、御返事を取て給り候へ

［元］さむ候神主殿へ申上へき子細有て参りて候

［西］さん候神主殿へ申上度子細有て参りて候

［元］都より女性旅人の一人我等か宿に御留り候か、此文を神主殿へ参らせよと申させ候

［西］都よりも女性旅人の一人我宿に御泊り候か、此文を神主殿へ参らせよと申され候（「一人」朱線見消）

【3ウ】

［元］おさなき人をは連申されて候　サコ／いまた某か屋に御座候

［西］稚き人を一人連申されて候

［元］左様の御事をは存せす候、旅人の事にて候程に

［西］左様の事をは何をも存せす、旅人屋の事にて候程に（「左様の」の後に「御」と朱傍記、「何をも」「、旅人屋の事にて」朱線見消）

［元］追うしなひ

［西］追出し

［元明］神主殿の

［西］神主殿ゟ（「の」朱線見消、「へ」と朱傍記）

［元］聽て御返事を給つて候、急て

［西］頓て御返事を給りて候、急て

［明］則御返事を給はりて候

【4オ】

［元西］荒うれしとはやく御届候物哉、さらはやかて

［西］荒嬉しと早く御届候物哉、頓て

［明］あらうれしや、さらば

［元西］御下り珍敷候へ共

［明］御下りは珍しう候へ共

［元西］遥かの遠国に独りは下りかたし

［明］かゝる遠国に独りはえ下り候まじ

［元明］對面申事は

［西］對面申事も（「も」朱線見消、「は」と朱傍記）

［元西］梅千世（［西］表記は「梅千代」）
［明］梅丸
＊以下、4ウ・6オ・7オ・10ウ・12オ・13オも同表記。

【4ウ】
［元西］此身は不肖なれは
［明］不肖なるものなれば

［元西］帰り給へ
［明］帰り候へ

［元］あらつれなとかゝれたり
［西］つれなと書れたり（「な」の後に「や」と朱傍記）
［明］あらつれなくもかゝれたり

［元西］あら浅ましや
［明］あさましや

［元］梅千世かくて候へは
［西］梅千代かくて有ならは
［明］梅丸かくて候へば

【5オ】
［元西］一跡
［明］跡

［元］こゝろ哉
［西］心なれ
［明］我身なれ

【5ウ】
［元西］ひたすらに、夢うつゝなき（［西］は「平天」に朱傍記「ヒタスラ」）
［明］こはいかに、夢かうつゝか

［元］置申そとの
［西］置申ネとの（「そ」朱線見消、「な」と朱傍記）

［明］置申まじきとの

［元］この屋をあけて何方へも
［西］此やをあけて何方へも（「此やをあけて」朱線見消）
［明］此屋を出て何方なりとも

【6オ】

［元明］立こえ
［西］立寄（「寄」朱線見消、「こへ」と朱傍記）

［元明］まち給へ
［西］待候へ（「候」朱線見消、「給」と朱傍記）

［元明］替り給ふ
［西］替り果給ふ

【6ウ】

［元西］藍染河に
［明］はや染川に

【7オ】

［元明］如何なる
［西］いか様なる（「様」朱線見消）

［元］今夜某か所に留りたる女性にて渡り候
［西］今夜某か所に留たる女性にて渡り候（「今夜」「渡り」朱線見消）
［明］今夜某ケ所に泊りたる女性にて候

【7ウ】

［元］投給ひて候そ急て御覧候へ
［西］なけ給ひ候、急て御覧候へ
［明］投給ひて候ぞ御らん候へ

［元明］御有様やな
［西］御事や

［元西］かくてましませは

［明］　おはしませば

［元西］父母さへに捨子となる、みつからは誰を頼へき
［明］　母上さへもましまさで、今より誰を頼べき

【8オ】

［元西］あいそめ川に
［明］　染川さして

［元］　暫候、是は勿躰なき御はたらきにて候
［西］　暫く候、勿躰なき御はたらきにて候（「候」朱線見消）
［明］　しばらく

［元明］おこと身を投給ひては
［西］　御身を投給ては（「御」朱線見消、「おこと」と朱傍記。「給」の後に「ひ」と朱傍記）

［元明］留り候へ
［西］　留り候へ（「候」朱線見消、「給」と朱傍記）

［元］　是は母この遊はされたる文にて候、御形見に能御持候へ
［西］　是は母この遊はされたる文にて候、御形見に能御持候へ（「遊」に「ツカハナレ」と墨傍記、「能」朱線見消）
［明］　又是に梅丸へと書たるふみの候、是はまさしく母御の御書置と存候間、かたみとも御覧候へ

【8ウ】

［元西］藍染川に人のおほく
［明］　染川に人のおほく

［元］　推量仕りて候
［西］　推量仕候（「仕」朱線見消、「申」と朱傍記）
［明］　推量申て候

［元明］某他所に
［西］　某小他所に（「か」朱線見消）

［元西］藍染川に人の多く

［明］染川に人の多く

【9オ】

［元］網をは引か
［西明］網をはしひくか

［元］急ひて皆々あかれと申付候へ
［西］急て皆々あかれと申候へ
［明］みな〳〵あかれと申付候へ

［元］網をは引か、殺生きんたんの所にて有そ、急て
［西］網をはしこくか、殺生禁断の所にて有そ、急て
［明］殺生禁断の所なるに

［元］や、左近尉渡り候か、是へ神主殿の御出にて候、急御参り候ひて、此謂を御申候へ
［西］や、左近尉にて渡り候か、是へ神主殿の御出にて候、急て御参り有て、此謂を御申候へ（「か」「是へ」朱線見消、「御出」の前に「是へ」と朱傍記）
［明］ナシ

【9ウ】

［元］／心得申候　／いかに申上候、網にてはなく候、人の身を投たるよし申候、あれに左近尉か候て、謂を申上うすると候へ是へ参りて候
［西］／心得申候　／いかに申候、網にてはなく候、人の身を投たる由申候、あれに左近尉か候ひて、謂を申まうすると申て是へ参りて候（「申候」の間に「上」朱傍記、「さ」朱線見消、「上」と朱傍記、「申て是へ参りて」朱線見消）
［明］ナシ

［元］いかに左近尉、身を投たると申はいかやう成者にて有そ
［西］いかに左近尉、身を投たると申はいか様なる者そ
［明］ナシ

［元］さん候都よりも女性の人を尋て下り候か、逢ぬを恨て身をなけたる由申候
［西］さん候都よりも女性の人を尋て下り候か、逢ぬ事を恨み

て身をなけたる由申候

［明］ナシ

【10オ】

［元西］ナシ

［明］いかに申上候、網にてはなく候、人の身を投たる由申候

［元西］言語道断、都よりはるはる下りにたるに、あはぬはふとくしん成者にて有よな

［明］言語道断、又

［元明］者にて有そ

［西］者にて有そ（「にて有」朱線見消）

［元］子にて御座候

［西明］子にて候

［元西］文にて有か

［明］文にてはなきか

［元］ナシ

［西］ヲトコ／さん候文にて候

［明］供／さん候文にて候

【10ウ】

［元明］見うすると

［西］見度由申て

［元］なう其文をそと人の

［西］いかに梅千代殿、其文をそと人の（「人の」朱線見消）

［明］なふ其文をそと神主殿の

［元明］仰候給り候へ

［西］仰候程に給り候へ

［元明］いや是は

［西］否是は（「否」朱線見消、「イヤ」と朱傍記）

［元明］参らせ候まし
［西］参らする事は候まし

［元明］ナシ
［西］此方へ給り候へ

【11オ】
［元西］捨妻の衣〳〵なれは恨もなし
［明］かくても恨まじ

［元］子にしれぬ
［西］子にしられぬ
［明］子を思はぬ

［元西］いひかひなくは
［明］いひかひなく共

［元西］一条今出川の御留主、當所の、御名はしらねとも、御在京の御時は、中務頼澄宰府の神主
［明］ナシ

【11ウ】
［元明］やあ、言語道断の次第にて候物哉
［西］や、言語道断の次第にて候物哉（「物哉」朱線見消）

［元明］事と社存て
［西］事と存て

［元明］神主殿の物仰られうすると仰候
［西］神主殿の物を仰られうすると仰候（朱線見消）

【12オ】

【12ウ】
［元西］ゆふつけの、とりつき髪かきなて
［明］思ひ子の、黒かみをかきなで、

［元西］いかに左近尉

［明］いかに誰かある

［元西］いかにて御座候

［明］いかゞにて候

［元明］惣而死人を

［西］あれ躰の死人を

［元］路地の事を申

［西明］ナシ

【13オ】

［元明］そと一目

［西］そと十目（朱線見消）

［元西］しかいのあたり成人をのけ候へ

［明］あたりの人をのけ候へ

［元］神主殿御出有そ、皆々罷のき候へ

［西］神主殿の御出有そ、皆々のき候へ

［明］神主殿の御出にて候皆々のき候へ

［元］又梅千世か事は、某一跡を譲り世にたてうするにて候

［西］又梅千代か事は、某か一跡を譲り世に立うするにて候（「又」朱線見消）

［明］此うへは梅丸をばそれがしが家督となし候はん

［元西］又御跡をも

［明］又御身のあとをば

【13ウ】

［元西］面かけの

［明］面影も

【14オ】

［元西］るい〳〵たる、こふむの邊里

［明］ナシ

［元西］朽果て
［明］朽果ん

［元西］いかに左近尉
［明］いかに誰かある

［元明］不便に有間
［西］不便に有間（「有」朱線見消、「候」と朱傍記）

［元］かんたんくたき、彼者の命を二度そせいさせはやと思ふはいかに
［西］肝膽をくたき彼者の命を二度蘇生させはやと思ふはいかに
［明］肝膽を摧き、彼者を蘇生させばやとおもひ候

【14ウ】
［元］御意尤にて候
［西］御意尤にて候（「御意」朱線見消）
［明］尤にて候

［元］さらは祝言を参らせうするにて候　サコ／しかるへう候
［西］さらは頓て祝言を参らせうするにて候　ヲトコ／然へう候
［明］ナシ

［元西］のつとを申しけり
［明］祈誓を申けり

［元］によたいしゆ
［西］如■■（■部分、「諦受」を胡粉抹消）
［明］如諦珠

［元］十寶三宝けいけむしゆ
［西］十方■■■■■■■■（■部分、「三寶けいけんしゆ」？を胡粉抹消）
［明］十方諸神影現中

［元］かしんけいれい三宝前つめむけつそく
［西］我身敬礼三宝前頭面せつそく（「敬礼三宝」朱線抹消、「敬礼」に「影現」、「三宝」に「神祇」と朱傍記し、この四字全

体を胡粉抹消。ただし胡粉は薄い）

［明］我身影現神祇前頭面接足

【15オ】

［元］めいちよに勝れ

［西］■■■勝れ（■部分、「名如に」を胡粉抹消）

［明］明智世に勝れ

［元明］地を點して

［西］地を轉して

［元］や本地かくりう如来

［西］や本地覺王如来

［明］本地覺王如来

［元西］たゝ頼め、しめちか原のさしも草、われ世の中に有む限は

［明］いのらずとても善悪を正さぬ事のあるべきや

【15ウ】

［元西］昨日は北闕に、〳〵悲しひを蒙る身なれとも、けふは西都によみかへさむと、生てうらみ死して悦ふ、有難のちかひや（「悲しひ」を［西］は「悲しみ」とする）

［明］ナシ

［元西］ナシ

［明］いかに何時慥にきけ、謀書をなしつる女を閻王におくり、入水の女を蘇生せしめん、今よりしては妻と定め、梅丸を嫡子とせばいよ〳〵家も栄ふべし

【16オ】

［元西］みやう〳〵と有

［明］冥々たる

［元明］いたらす

［西］至らん

「藍染川」（明和刊本では「染川」）は明和段階で大きく改訂

された曲といえるが、それが［西］での改訂を経て成立したかどうかとなると、それを裏付けるような校異が殆どない。明和段階での改訂が大規模ならば、その前段階での本文検討の痕跡は吹き飛ぶことになる。8ウの［明］「推量申て候」や、14ウの［明］「尤にて候」などは［西］の改訂と一致するが、これらの一致だけでは確かなことは言えない。

◆小鍛冶

＊［西］（100／16／11）識語「享保十四年六月晦日直ス／右之通西丸江章直シ共ニ相納差上候扣也　清親」（朱筆）

【1オ】

［元］是は一條院に仕へ奉る

［西］是は當今に仕へ奉る（「當今」部分、「一條院」を胡粉抹消して上書）

［元］去程に今夜

［西］去程に（左に朱点を打ち、右に「さても」と傍記）

［明］此暁

［元西］三條小鍛冶宗近を召

［明］三條の小鍛冶宗近に

＊以下、［西］は七行程、本文の行間に異なる本文を墨で傍記し、その上に貼紙をして傍記に近似する本文（もとの本文と同筆）を記し、それをさらに朱墨と胡粉で改訂する。以下、［西］は貼紙の下の本文を示し、傍記の掲出は省略し、貼紙の記事を［西貼紙］として示す。

［元西］急宗近を召よせ此事を申付はやと存候

［西貼紙］只今宗近か私へと急候（「只今」部分、元の二字を胡粉抹消し上書。「私」に朱圏点を打ち、「私宅」と朱書、それを朱線見消にして「許」と朱傍記）

［明］今宗近が私宅へ立越候

［元西］いかに誰かある　トモ／御前に候　大臣／三條の小鍛冶宗近か私宅に越、仰付らるへき子細有、急き参内仕れと申付候へ　トモ／畏て候　大臣／いかに宗近、汝に御劔をうたせら

るへきとの勅定にてあるそ、急て仕り候へ（ただし［西］は「子細有間」）

［西貼紙］いかに此屋の内に宗近かあるか（「此屋の内に」「かあるか」左に朱線を引く）　ワキ／宗近とは誰にて渡り候ぞ（「誰」に「いつ」と朱傍記、「候そ」に「候らん」と朱傍記）　ワキツレ／是は一條院の勅使にてあるぞとよ（「一條院の」墨線見消、「使にてあるぞとよ」左に朱点を打ち、右に「を承りて是迄来りたり」と朱傍記）、扨も帝今夜ふしきの御つげましますにより、宗近を召御釼をうたせらるべきとの勅定にてあるそ（「にてあるそ」朱線見消、「なり」と傍記）、急て仕候へ）

［明］いかにこの屋の内に宗近があるか　ワキ／宗近とは誰にてわたり候ぞ　ワキツレ／是は勅使にてあるぞとよ、さても此暁ふしぎの御告ましますにより、宗近をめし御釼をうたせらるべきとの勅諚なり、打て奉候へ

【1ウ】

［元明］御釼も成就候へけれ

［西］御釼も成就候へけれ（「候」に朱点を打ち、「仕」と朱傍記）

【2オ】

［元］兎角に御返事

［西明］兎角の御返事

［元西］実々汝か申所はことはりなれとも、帝不思議の御告ましませは、頼母敷おもひつゝ、はや〳〵領掌申へしと、重て宣旨なりけれは（［西］は「掌」に「状」と朱傍記。また［西］は、「宣旨有けれは」の本文で、「有」を朱線見消、右に「なり」と朱書、これを朱線見消して左に「あり」と朱傍記）

［明］申すところはことわりなれども、御つげといひ勅諚を、いなみ申さばおそれなり、はや〳〵勅にしたがふべし

【2ウ】

［元明］もしも

［西］若も（「若」に朱点を打ち、「猶」と朱傍記）

［元西］さあらは私宅に帰其用意を仕候へし、急て壇を御つかせ候へ（［西］はこの記事に朱線を引き、その前と後に朱で

△を記す）
［明］ナシ

【3オ】
［元明］稲荷に参り
［西］稲荷ヘ参り（「へ」朱線見消、「に」と傍記）

［元明］なへてならさる御事の
［西］なべてならざる御事の（「事」に朱点を打ち、「み姿」と朱傍記）

［元西］いかなる人にてましますそ（［西］は「そ」に朱点を打ち、「か」と朱傍記）
［明］そも何事にて有やらん

［元西］雲の上なる帝より、劔をうちて参らせよと、汝に仰有しよなふ（［西］は「帝より」に朱点を打ち、「みことのり」と朱傍記）
［明］わが大君の御つるぎを、汝にうちてたてまつれと、只今宣旨有しよなふ

【3ウ】
［元］我のみしれは余所人迄も
［西］我のみしれはこそ人迄も（「こ」に「よ」と朱傍記）
［明］唯われのみかよそ人迄も

［元］天に拝あり
［西明］天に聲有

［元明］壁に耳岩のものいふ
［西］壁に耳岩の物いふ（以上八字に朱点を打ち、「汝も知れは我もしる」「教ありてふ」と朱傍記）

［元］雲の上人の御劔の
［西］雲の上なる御劔の（「なる」部分、「人の」を胡粉抹消し上書）
［明］雲の上なる御つるぎの

［元明］かなはさるへき

［西］叶はさるへき（「へき」に朱点を打ち、「らん」と朱傍記）

【4オ】

［元西］近比面白き人に参りあひて候物かな、猶々劔の謂御存知候は、御物語候へ　／さらは語てきかせ申候へし（［西］はこの全体を朱線で囲う）

［明］ナシ

【4ウ】

［元］晋の乱れを治め

［西］秦の乱れを定め（「定」、「治」を胡粉抹消し上書）

［明］秦の乱を定め

［元］又煬帝かけいのつるき

［西］又煬帝のけいの釵（「の」、「か」を胡粉抹消し上書）

［明］又文帝の飛景の釵

［元西］しうしつのひかりを、うはへり

［明］流星のひかりを、うばへり

［元西］鍾馗大臣も

［明］鍾馗の霊も

【5オ】

［元］景行天皇、詔の御名をは

［西］景行天皇、御子の御名をは（「御子」部分、「尊」を胡粉抹消し上書）

［明］景行天皇の、皇子の命の御名をば

【5ウ】

［元西］あらめやと、思ひつゝけて行ほとに

［明］あらばやと、おぼしつゞけておはします

［元西］数度に及へる

［明］数度に及べば

［元西］尊の御宇より

［明］尊これより

【6オ】
［元］餘煙しきりにもえきたり
［西明］餘焔頻に燃あかり

【6ウ】
［元西］失せてむけり
［明］失てけり

【7オ】
［元西］其草なきの
［明］かの草薙の

［元西］時にとつての
［明］折からことに

［元明］如何成人そ
［西］いかなる人そ（「そ」に朱点を打ち、「か」と朱傍記）

【8オ】
［元西］宗近時に至て
［明］宗近が時に至つて

［元西］仁王六十六代一條院の御宇に
［明］人皇六十六代の朝廷に

［元］伊弉冊の
［西］伊弉冊の（末尾に「尊」と朱傍記）
［明］伊弉冊の尊

【8ウ】
［元西］なんせむそうかたこく、はしみた尊者より以来、天國ひつきの子孫に傳ていまに至れり（ただし［西］は「はしみた」部分、「はつしみた」とする）
［明］素戔嗚尊、八股の大蛇を討給、其尾の劔を取出て、天の御神に捧まし、八寸鏡につゞきたる皇御國の御寳とて、熱田の社に鎮祭れり

［元明］諸神
［西］衆神（「衆」朱線見消、「諸」と朱傍記）

【9オ】
［元］童男壇
［西明］東南壇

【10オ】
［元明］村雲とも
［西］村雲共（「共」に朱点を打ち、「とは」と朱傍記）

［元明］稲荷の神躰
［西］稲荷の神躰（「躰」に朱点を打ち、「通」と朱傍記）

「小鍛冶」の場合、1オの問答の［西］の貼紙改訂本文が明和刊本との一致度が高い点が特に注目される。他にも、1オの［明］「是は當今に仕へ奉る」、3ウの「［明］雲の上なる御つるぎの」4ウの［明］「秦の乱を定め」など、［西］の改訂本文が［明］と一致する箇所を確認できる。一方で、［明］の段階でさらに改訂されたと考えられる異同も、本稿で扱った他の多くの曲同様、多い。

五、小括

本稿では、西丸への献上謡語がある観世文庫の紺表紙一番綴謡本の十冊のうち、「〔和布刈〕」と「大社」を除く八冊について、その本文を検討した。特に「岩舩」「土蜘蛛」「小鍛冶」において、西丸への献上本扣えの本文をさらに改訂する形で、明和改正謡本の本文が成立したと思しき経緯が顕著にみられ、また他の曲でも、部分的に明和刊本との共通性を持つ本文改訂を、西丸への献上本の扣えに確認することができた。一方で、「藍染川」のように、西丸への献上本扣えの本文と明和刊本との関係が見出しづらい曲もある。部分的に共通性がある曲の場合でも、西丸への献上本扣えを改訂した本文と明和刊本との間にも相当な距離があり、明和刊本での改訂が大がかりなものであったこと、曲によっては細部を多く直していることを改めて認識させられた。明和刊本では五十宮倫子への翳詞「急」を徹底して抹消するが、［西］の「輪蔵」「花月」「岩舟」「土蜘蛛」「藍染川」「小

鍛冶」では、西丸献上本の本文を改訂した段階でも「急」の字が確認でき、これらは宝暦年間以前の改訂と推測される。

元禄三年刊本との校異は参考として掲げたもので、享保年間に観世清親と幕府の間で行われた改訂の全体は厳密には特定できない。内組曲の場合、十三世観世大夫の滋章（重記）の名前が刊記に入った正徳六年三月山本長兵衛刊本によって、十四世清親の前段階での公的な本文が確認できるのに対し、外組曲では事情が異なる。ただし、［西］や［石］に朱や胡粉、貼紙等で加えられた改訂は、享保十年代から宝暦年間までの間、もし清親時代ならば没年の延享四年（一七四七）以前に施されたもので、そこに一部、明和刊本に通じる要素があることは重要である。明和刊本が十五世観世元章と幕府との密接な関係を背景に刊行されたことは知られているが、外組の曲について、享保年間に西丸に献上された謡本の本文をさらに改訂する形で、明和刊本が準備されたというのは、ある意味、理解しやすい経緯でもある。

同じく西丸献上の扣えであることを示す石畳艶出模様表紙謡本と比べると、「輪蔵」「岩船」「鶴亀」では紺表紙謡本（［西］）の改訂本文の方が明和刊本に近い傾向にあったが、「半蔀」では石畳艶出模様表紙謡本（［石］）の改訂本文の方が明和刊本に近いという相違も判明した。石畳艶出模様表紙謡本の性格については、追って本文を検討する中でさらに考えていきたい。

注

1　これらの本の概要については、拙稿「観世元章手沢・石畳艶出模様紺表紙一番綴謡本の周辺」（『観世元章の世界』檜書店、二〇一四年）でふれた。

2　表章『鴻山文庫本の研究　謡本の部』（わんや書店、一九六五年）。

3　大森雅子「明和本に関する一考察―その諸版をめぐって」（『観世』五〇―五、一九八三年五月）。

4　『観世』三九―四～四四―二、一九七二～七七年。

5　観世文庫所蔵の写真帳に拠る。

6　深澤希望「「師家」の型、「弟子」の型―『享保十四年清親奥書紺表紙謡本・土蜘蛛』型付書入れをめぐって」（注1前掲『観世元章の世界』）。